

試験研究成果普及情報

部門	野菜	対象	普及
課題名：作付面積の拡大が図れる食用ナバナの安定生産技術			
<p>[要約] 食用ナバナは9月上旬から10月上旬に「春華」、「京の春」、「栄華」、「華の舞」、「花まつり」を順次播種することで、需要期の2月下旬から3月中旬に収穫ピークとなり、11月から3月まで加工・業務需要に対応できる。播種時期の多雨対策として移植栽培を導入すると安定生産が見込まれる。</p>			
フリーワード 食用ナバナ、加工・業務、品種、大規模経営			
実施機関名	主 査	農林総合研究センター 暖地園芸研究所 野菜・花き研究室	
	協力機関	農林総合研究センター 研究マネジメント室、全農千葉県本部、夷隅農業事務所、安房農業事務所、君津農業事務所	
実施期間	2013年度～2015年度		

[目的及び背景]

本県の食用ナバナの荷姿は、高品質な花蕾を束ねる束出荷が中心であり、高単価で取引される。しかし、近年、加工・業務需要の高まりを受け、コンテナ等に詰めるバラ出荷や小袋詰め袋出荷が増加しており、南房総地域では大規模志向農家や基盤整備後に食用ナバナを導入した地区を中心に組み込まれている。そのため、計画生産・安定出荷が求められる加工・業務用出荷に適し、大規模経営等で利用できる生産技術を確立する。

[成果内容]

- 1 9月上旬から10月上旬にかけて根こぶ病抵抗性品種の「CR春華」(日東農産(株))、「CR京の春」(丸種(株))、「栄華」((株)サカタのタネ)、「CR華の舞」(丸種(株))、「CR花まつり」(丸種(株))を順次播種して栽培すると、需要期の2月下旬から3月中旬に出荷ピークを迎え11月から3月まで安定的に出荷が継続できる(表1、図1)。
- 2 「栄華」及び「華の舞」を9月下旬に播種すると、中旬播種に比べ収量が低くなるが、株間は30cmのまま、慣行よりも追肥の間隔を短く3週間ごととすることで、中旬播種と同等の収量が確保できる(表1)。株間20cmにする密植栽培は、収量確保の効果が劣る。
- 3 移植栽培により、直播栽培と同等以上の収量が得られる(表2)。定植前の液肥施用により更に増収が期待できる。播種期の多雨等により圃場準備が遅れて適期播種ができない場合などには、移植栽培の導入は安定生産に有効である。

[留意事項]

[普及対象地域]

南房総地域（夷隅、安房、君津地域）

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

表1 播種日と株間及び施肥量を変えて栽培したナバナの品種別収穫期及び収量（平成26年度）

播種日	品種	株間 (cm)	施肥量	収穫期間			可販収量 (kg/10a)	下物収量 (kg/10a)	可販率 (%)
				始期	終期	日数			
9月5日	春華	30	慣行	11月 1日	1月 5日	66	1,090 ± 18	266 ± 82	80
		45	慣行	10月29日	1月 5日	68	999 ± 77	226 ± 64	82
		60	慣行	10月31日	1月 5日	66	862 ± 133	185 ± 29	82
	京の春	30	慣行	10月31日	1月 5日	66	1,079 ± 39	213 ± 60	84
		45	慣行	10月31日	1月 5日	67	1,056 ± 181	213 ± 27	83
		60	慣行	10月31日	1月 5日	67	1,056 ± 181	213 ± 27	83
9月16日	栄華	30	慣行	12月16日	3月12日	87	1,508 ± 58	472 ± 58	76
		45	慣行	12月15日	3月12日	88	1,407 ± 154	405 ± 51	78
		60	慣行	12月17日	3月12日	86	1,348 ± 237	319 ± 36	81
	華の舞	30	慣行	1月10日	3月25日	75	2,275 ± 119	767 ± 75	75
		45	慣行	1月 7日	3月25日	77	1,822 ± 252	645 ± 42	74
		60	慣行	1月 7日	3月25日	77	1,822 ± 252	645 ± 42	74
9月26日	栄華	20	慣行	1月13日	3月25日	71	1,446 ± 84	696 ± 35	68
		30	慣行	1月15日	3月25日	70	1,342 ± 45	561 ± 52	71
		30	多肥	1月 9日	3月25日	76	1,640 ± 30	475 ± 49	78
	華の舞	20	慣行	1月31日	3月25日	53	1,862 ± 53	609 ± 103	75
		30	慣行	1月29日	3月25日	56	1,836 ± 274	495 ± 56	79
		30	多肥	1月29日	3月25日	53	2,071 ± 114	505 ± 25	80
	サカタ88	30	慣行	2月 9日	4月 2日	53	1,833 ± 263	604 ± 89	75
		30	慣行	2月19日	4月 2日	43	1,649 ± 136	332 ± 42	83
		30	慣行	2月19日	4月 2日	43	1,649 ± 136	332 ± 42	83
10月3日	サカタ88	30	慣行	2月19日	4月 4日	45	1,732 ± 133	661 ± 95	72
	花まつり	30	慣行	2月21日	4月 6日	44	1,588 ± 66	444 ± 60	78

注1) 試験は暖地園芸研究所内水田裏作圃場（館山市）において行った

- 幅100cmのベッドに各株間の2条で栽培した。各播種日にそれぞれの株間で点播し、1か月後に1株1本となるように間引いた。通路幅は50cmとした
- 基肥は、全ての区で牛ふん堆肥を10a当たり3.1t、苦土石灰を100kg圃場全面に、菜花16号（16-20-14）100kgをベッド部に施用した。追肥は、慣行施肥区では4週間ごとに、多肥区では3週間ごとに、1回当たりりん硝安加里（16-10-14）30kgをベッド部に施用した
- 頂花蕾は摘心し、側花蕾を長さ15cmで調製するように収穫した
- 可販率は、全収量に対する可販収量の割合を示す(n=3)
- 数値は平均値±標準偏差を示す(n=3)

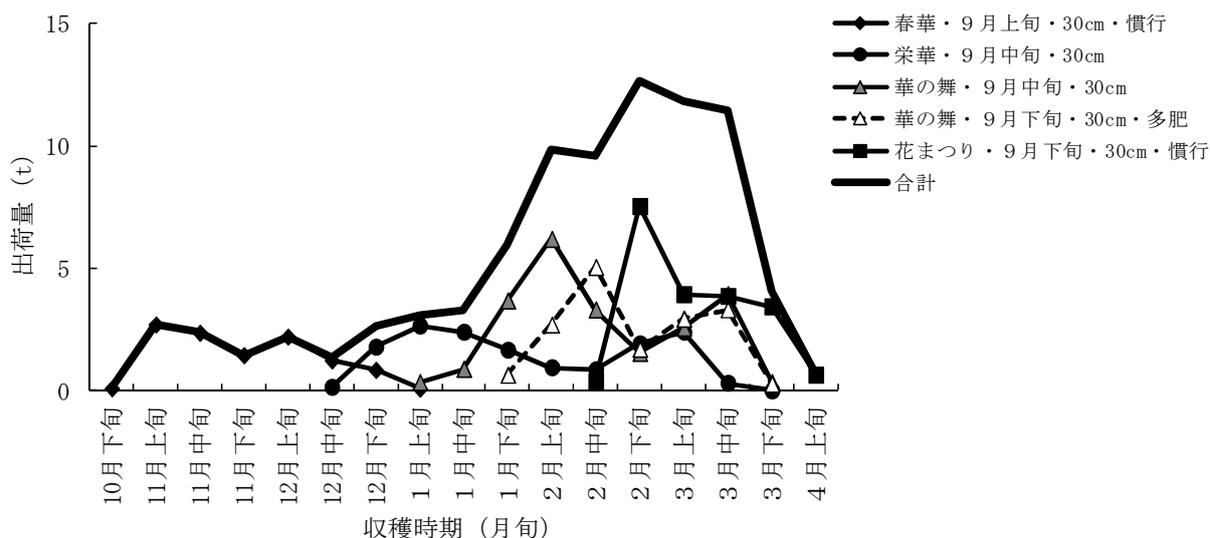


図1 品種、播種日及び栽培面積を組み合わせた作付体系における月旬別出荷量予測の推移
 注) 9月上旬に「春華」を100a、9月中旬に「栄華」100a及び「華の舞」100a、9月下旬に「華の舞」80a及び「花まつり」120aを播種する場合の出荷量を表1で栽培した時期別収量(データ未掲載)に基づいて計算した

表2 直播栽培及び移植栽培又は育苗中の追肥の有無が定植1か月後の生育及び収量に及ぼす影響(平成27年度)

品種	試験区	定植1か月後の生育		可販収量 (g/株)	下物収量 (g/株)
		草丈 (cm)	本葉数 (枚)		
春華	直播区	30.9 ± 5.3	10.4 ± 1.3	131 ± 29	17 ± 6
	移植・液肥区	39.4 ± 0.9	13.1 ± 1.6	158 ± 27	44 ± 16
	移植・無液肥区	35.8 ± 1.6	11.6 ± 0.7	129 ± 10	46 ± 9
京の春	直播区	31.3 ± 1.1	10.7 ± 0.7	116 ± 6	22 ± 7
	移植・液肥区	40.3 ± 0.3	13.2 ± 0.7	162 ± 12	38 ± 6
	移植・無液肥区	35.9 ± 0.7	11.6 ± 0.8	138 ± 12	38 ± 6

注1) 直播区は9月6日播種、移植区は9月2日に播種した苗を9月20日に定植した
 育苗にはニッピ良菜培土SP200(日本肥糧(株))と128穴セルトレイを用いた(培土の苗1本当たり窒素成分量は0.05g)
 2) 液肥区は9月18日に500倍希釈のOKF-1(窒素-りん酸-加里:15-8-7)を施用した(苗1本当たり窒素成分量0.23gに相当)
 3) 耕種概要は表1に同じで、株間は全試験区で30cmとした
 4) 定植1か月後の生育は、10月20日に各区10株を測定した(n=3)
 5) 頂花蕾は摘心し、側花蕾を長さ15cmで調製するように収穫した。収穫は、11月5日から1次側花蕾の収穫が概ね終了した12月4日まで行った(n=3)

[発表及び関連文献]

- 1 平成28年度試験研究成果発表会(野菜部門I、II)
- 2 プロジェクト研究事業「園芸産地活性化のための土地利用型野菜安定生産技術の確立」研究成果集、平成28年3月

[その他]

- 1 平成24年度試験研究要望課題(提起機関:全農千葉県本部)
- 2 プロジェクト研究事業「園芸産地活性化のための土地利用型野菜安定生産技術の確立」(平成25年度~27年度)